

## ピエール・アド Pierre Hadot における自然哲学の綱要

林 洋輔(大阪教育大学)

コレージュ・ド・フランス古代哲学史名誉教授であったピエール・アド(Pierre Hadot:1922-2010)により進められた「精神の修練 Exercices Spirituels」研究のうち、彼が多くを言及した「自然学 physique」を検討することで以後のアド研究における新たな議論の地平が拓かれる。というのも、近年のアド研究においては Balaudé (2010)あるいは Chase(2013)そして Le Ru (2015)のようにアドの思想形成の歩みないしは彼が遺した「精神の修練」に関わる言及への総評が行われるに留まる一方、Davidson(1995)が指摘するようにアドはフーコーの虚を衝く形で「精神の修練」における自然学の議論を独自に発展させており、いわば「ピエール・アドにおける自然哲学」の成立と展開とを見込むことができるからである。

上の研究背景を受けて本発表では一方で Pavić(2012,2015)などの先行史を継ぎ、他方でアドの諸著作における自然学および自然哲学に関わる言及に拠りつつ、「ピエール・アドにおける自然哲学」の成立基盤とその綱要とを明らかにすることで以後に続くアド研究の起点形成を試みる。

プロティノス研究者として著作——Plotin, ou la simplicité regard (1997)——および彼に対する注解(1990,1994,1998,1999)を果たしたアドであるが、やはり彼独自の自然哲学は「精神の修練」研究の只中において生成されてきたと観るべきであろう。というのも、アド(2001)が問われて述べるように彼における新プラトン主義研究からいわば距離を置いたところに「精神の修練」研究そして自然研究が発展してきたこと、また彼の生涯後期における諸著作での「精神の修練」研究——例えば “Qu'est-ce que la philosophie antique?” (1995)や “Introduction aux Pensées de Marc Aurèle” (2005)、そして後述する “Le Voile d'Isis” (2004)あるいは “N'ouvrier pas de vivre : Goethe et la tradition des exercices spirituels” (2008)など——、さらにはエピクテトスの著作に対する注解(2000, 2004)のなかでアド独自の思索に基づく自然への洞察が豊かに展開されたからである。

ところで、アドにおける自然哲学を彼の諸著作から再構成するのならば、上記の Pavić(2014)が先鞭をつけるように、ローマ帝政期の哲学に着眼したアドの研究に着目することが議論の展開に適切である。なるほどアド(2010)においてはプラトンの『ティマイオス』を「詩(情) Poésie」の観点から読み直す議論が見られることに加え、彼はヘラクレイトスの箴言である「自然は隠れることを好む *phusis kruptesthai philei*」への検討を施した議論も “Le Voile d'Isis” にて遺している。このことから、古代ギリシア哲学を舞台とした自然研究こそアドにおける自然哲学の「母体」をなすものであるとの主張も考えられる。しかしながらアドが自らの諸著作で繰り返し論じている自然哲学——それは「高所からの眺め regard d'en haut」や「自己の現時への集中 la concentration du moi sur le présent」といった視点、あるいは論考「智者と世界 Le Sage et le monde」にみられる議論——はいずれもセネカあるいはマルクス・アウレリウスといった哲学者たちの影響を多分に被るものであって、その影響はアド(2001,2008)がモンテーニュそしてゲーテにおける古代哲学の影響を論ずるうちにも議論の後景として確認できる。小括的に言えば、「アドにおける自

然哲学」とはその起点をローマ帝政期における自然研究に置くものであって、当該時期の哲学に対する解釈を通じてアドにおける自然哲学の基盤が築かれたとの報告に持ち込みたい。

ところで、以上のようにアドにおける自然哲学の基盤が据えられるとするならば、その議論から次にいかなる展望が拓けてくるのだろうか。一見逆説的ではあるが、ヘラクレイトス研究の展開された先の “Le Voile d'Isis” において明示された以下の二つの自然観——言うなら「自然の観方」——に着眼することによって議論がさらに展開する。

アドは “Le Voile d'Isis” における議論の中盤以降において、哲学史を貫流する二つの自然観について考察を進めている。すなわち、一方における「プロメテウスの態度 L'attitude des prométhéenne」、そして他方における「オルフェウスの態度 L'attitude orphique」である。本発表では両者のうちでもとりわけ後者においてアド自然哲学における独自性が認められるとの立場から議論を進捗させる。というのも、前者においてアドは自然に対する人間の態度を「機械学 La mécanique」と「魔術 La magie」そして「自然の機械化 Mécanisation de la nature」といった諸観点から古代よりルネサンス期にわたって堅実に論じる一方、後者においてはセネカやアリストテレスの言及を皮切りとして「自然の振る舞い Le Comportement de la nature」の諸相を「詩的様相 Le Modèle poétique」や「感性的知覚 La perception esthétique」の観点からも論じることにより、現行の自然科学観とは異なる自然観のもとに自らの自然哲学を表明するからである。このことを別の側面から言い直すならば、“Le Voile d'Isis” におけるゲーテへの言及がなお発展して “N'ouvrier pas de vivre” に継がれるとともに、このゲーテ論におけるストア哲学への言及によって現代の自然科学観を根本的に捉え直すものとしてのアド自然哲学の核心が明示される。本発表ではストア哲学研究からゲーテ研究にわたる議論の振幅がアドにおける自然哲学の核心をなすとの主張を提出し、アド(2001, pp.217ff, esp. p.223.)の言及における「俳句 haïku」あるいはセザンヌ Cézanne やパウル・クレー Paul Klee への言及をもにらみつつ上の主張の論証を試みる。

ところで、以上のようなアド自然哲学の成立と展開とが論じられる際、アドが自らの諸著作で示した「生き方としての哲学 La Philosophie comme manière de vivre」との関係が問われねばならない。この検討課題について、本発表の終盤ではアドがその仏訳に「序文 Préface」(未邦訳・未英訳)を寄せた、道元の『正法眼蔵 Le Shôbôgenzô de maître Dôgen : La vraie Loi, Trésor de l'Oeil』(2014)に対する彼の言及を精読し、アドにおける自然哲学と「生き方としての哲学」との関係を検討する。道元と「生き方」については、わが国戦前の生理学者・思想家である橋田邦彦(1882-1945)が『正法眼蔵』に拠りつつ「全機性」あるいは「行としての科学」といった独自の自然哲学をうち出したように、本発表でもアドにおける『正法眼蔵』解釈のうちに自然観と人間の「生き方」との交錯を観たい。

総括的に述べるならば、アドにおける自然哲学は “Le Voile d'Isis” における「オルフェウスの態度」を自然観の基盤とし、後期ストア派の巨頭たちからゲーテにわたる彼の議論によってその成立根拠と綱要とが明らかになる。そればかりではなく、道元に拠る日本の自然観のもとでの「生き方」の肯定によって彼の自然哲学が終結するものであったとの最終結論に持ち込みたい。